

第5回 博士人材の産業界への入職経路の多様化に関する勉強会 議事要旨

1. 日時・場所

日時：令和6年2月1日(木)12時00分～13時00分

場所：Teamsによるオンライン会議

2. 出席者

(メンバー) ※敬称略、五十音順

伊東 眞琴 株式会社tayo (熊谷 洋平 株式会社tayo 代表取締役 の代理出席)

上村 崇 epiST株式会社 代表取締役社長

加茂 倫明 株式会社LabBase 代表取締役CEO

野崎 光太 株式会社CoA Nexus 代表取締役

深澤 知憲 株式会社エマージングテクノロジーズ 代表取締役社長

山田 諒 株式会社アカリク 代表取締役社長

(オブザーバー) 文部科学省

(事務局) 経済産業省 産業技術環境局 大学連携推進室

デロイト トーマツ コンサルティング合同会社

3. 議事

「博士人材の産業界への入職経路の多様化に関する勉強会 議論のとりまとめ(案)」についての事務局説明と意見交換

4. 議事概要

- 「博士人材の産業界への入職経路の多様化に関する勉強会 議論のとりまとめ(案)」についての事務局説明と意見交換

➤ 資料3に基づく事務局説明の後、以下の議論が行われた。

(「博士人材採用ニーズの不足・偏り：全体ニーズ・企業の部門ごとのニーズ」について)

- ◇ P.13 について、自社でも様々な人事の方とお話するが、エンタープライズ企業等を中心に、博士号を取得し、研究開発部門を経て人事をやっている方もいらっしゃる。人事が現場のニーズを理解していないわけではなく、人事は全社の採用を見るので、営業部門やその他の部門での採用枠を学士・修士で充足するということもある中での総合的な判断をしている部分もある。また、いわゆる部署人事(HRBP)の配置不足の可能性もあるかもしれないし、研究開発部門以外からの博士人材のニーズ不足、あるいは研究開発部門の規模が小さいという考え方もできると思う。

(博士人材の民間企業での活躍に向けた情報発信について)

- ◇ 企業の中でも人事責任者(人事部長やCHRO)にどういったメッセージを出したいかを考えると、現場に博士人材のニーズがあるということもそうだし、博士人材の採用の際には現場を巻き込んだ方が確実に採用しやすく、採用候補者にとってもアトラクトになるということもある。メッセージ発信に当たっては、人事部門にとってのメリットを示すとともに現場のニーズを満たせることも強調する等、企業内のステークホルダーを分解し、それぞれにとって耳触りが良く、かつ行動変容につながるようなメッセージになっていることが重要と考える。

(その他)

- ◇ 今回取りまとめた情報が大学関係者や博士学生の目に広く留まって彼らの行動が変容するまで、フォローしていくことが重

要。今回の結果の発信だけでなく、定期的な情報発信や改善結果の共有といったことを期待したい。

- ✧ 勉強会に関する発信が、実際に企業の博士採用に関する意識や行動の変容に少しずつつながり始めていると感じる。こうした情報発信をして、企業の採用等の行動が変わることがゴールであるため、自社含むメンバーが切磋琢磨しながら取り組んでいきたい。
- ✧ 政府や就職支援事業者等の各ステークホルダーが集まり議論し、他人事ではなく自分事として進めていくことが具体的なアクションにつながっていくと感じた。
- ✧ 日本の民間企業から見ると修士学生の新卒人材で事足りてしまっているのが現状だと思う。日本の民間企業がもし博士人材を追加で採用する場合にその人材に求める要件にフィットするようなスキルを、博士人材が身に付けられる教育課程・プログラムが組まれていくのであれば、企業側もより積極的に博士人材を採用したくなるのではないかと考える。企業が雇いたいと思うような博士人材を育成する環境を実現していければよいと思う。
- ✧ 細かな部分で見え方や把握できていること、できていないことの相違はあるものの、各社が全体として同じような肌感覚を持って博士人材のキャリアを捉えていることが分かった。今回の勉強会は入職経路の多様化に関するものだったが、留学生に関すること、人文社会学系の博士学生に関すること、ポスドクの転職など、博士人材のキャリアパスの多様化や民間企業での活躍という文脈で議論すべきことはまだまだたくさんあるのではないかと考える。
- ✧ 博士人材に対するキャリア支援を行う中でずっと課題に思ってきたことを共有し、共感いただいたり更なる課題の存在に気づけるご意見をいただいたりして、様々な角度からこの事業を改めて捉えることができた。アウトプットを残せたので、一歩一歩、歩みを進めていけるよう、手を取り合いながら協力していけるとベストだと思っている。また、自社イベントに集まってくれた博士学生から、「他の大学の博士学生との交流機会がもっと欲しい」といった感想や「民間企業から自分のアウトプットへのフィードバックをもらえると勉強になる」といった感想をもらった。そのため、自社としても横やクロスコミュニケーションの機会をより増やしていきたいと思っているところ、昨年9月に開催された文科省主催の「未来の博士フェス」はすごく良かった。あのようなイベントを定期的 to 実施できると、民間企業・大学・学生の距離が縮まると考える。

以上